

日本で最初にシンデレラを描いた人物

— 印藤真楯と『正則文部省英語読本』 —

川戸道昭

明治 22 年に外山正一が編纂した英語教科書に『正則文部省英語読本』(*The Monbusho Conversational Readers*) という教科書がある。これは、日本人が日本の児童生徒のために編纂した最初の英語リーダーの一つで、そこに独自の英語教育観が込められていたという点で、初期の英語教育史上見逃すことのできない教科書の一つとなっている。とりわけ注目されるのは、日本の英語教育を徹底したオーラル・コミュニケーションにもとづく「正則」英語教育へと変えようとしている点である。当時一般に行われていた英語教育は、欧米人が欧米の子弟を対象に編纂した舶来のリーダーに頼っていたために、どうしても講読中心の授業にならざるをえなかった。本書は「其弊害を避け専ら正則に依りて英語を教授する方法を設け」ようとしたところに、当時の英語リーダーとしては他に例を見ない先見性が認められる。

英語教育史の観点からみた場合の評価はそういうことになるが、実はこの教科書にはもう一つ、日本の文化史上見逃すことのできない重要な意味が認められる。それはこの教科書が「シンデレラ」や「赤ずきん」(いずれもペロー童話に由来する物語)などの西洋著名童話を紹介する日本で最初の教科書であったということである。単に、物語の紹介というだけではない。縦 22 センチ、横 16 センチのページ全体(ないしはその大半)を使って、「シンデレラ」のさし絵が 4 葉、「赤ずきん」のさし絵が 2 葉挿入されている。それは、シンデレラと名付け親がカボチャとネズミを前に相談をする姿、あるいは、赤ずきんが牙をあらわにした狼と連れ立って歩く姿等、一目見ただけで脳裏に深く刻みつけられてしまうような個性あふれるさし絵である。私はこれまで、明治前半の書物や雑誌を 20 年近くも調査してきたが、それ以前の書物や雑誌でシンデレラや赤ずきんのさし絵というものを目にしたことがない。単に教科書ばかりか、一般の児童書や雑誌を含めても、これがシンデレラと赤ずきんという西洋著名童話の主人公の姿を描いた日本で最初のさし絵であった可能性は高い。

それだけではない。そのさし絵を描いた人物がまた初期の日本画壇において忘れることのできない人物と知れば、この教科書の有する歴史的意義はますます深いということになる。当初、私は『正則文部省英語読本』のどこを調べても画工の名前が記されていないために、おそらくは名もない職人の手になるものだろうと受けとめて、それ以上の詳しい調査はしないうえに、しかし、「シンデレラ」と「赤ずきん」が掲載されている『第三巻』のさし絵を漫然と眺めるうちに、ある興味深い共通点がみられることに気がついた。そのさし絵の多くに、「M. I」ないしは「M. Indo」なる文字が添えられているので

ある。なかにはさし絵の線にまぎれて見えにくいものもあるが、確かにそこには「M. Indo」の文字がみえる。

初期の画壇に「M. Indo」のイニシャルを有する人物とは誰か。さいわいにも、そうした名前をもつ人物は、日本全体をみわたしてもそういない。ましてや、初期の日本画壇ということになれば、考えられるのはただ一人、日本洋画壇のパイオニア印藤真楯をおいてほかにない。彼の作品を所蔵する府中美術館のホームページに掲載された情報によると、「印藤真楯は旧姓千葉、文久元年（1861）生まれ、大正3年（1914）年没。明治9年（1876）工部美術学校が開設されると同時に同校に入学し、イタリアから招かれたフォンタネージに学んだ、日本洋画の初期の開拓者のひとり」とある。同美術館に所蔵される「子供の遊び」と題する作品に関連して、「美術教育の先駆者でもあった作者は、子供の世界にも興味を寄せていた」とも記されている。また、印藤が学んだ工部美術学校における教育の実態を詳しく調査した茨木大学の金子一夫氏によると、同校の初期の生徒のうち人物画を専攻する希望を持っていたのは、印藤と松岡寿の2人だけで、ほとんどは風景画のほうを希望したという（金子一夫「工部美術学校における絵画・彫刻教育」『学問のアルケオロジー』東京大学出版会、1997年）。

要するに、早い時期から人物画に関心を寄せ、子どもの世界にも興味を懐いていた印藤真楯、その画風をもっともよくあらわしているのが『正則文部省英語読本 第三巻』に掲載された50葉にもおよぶ木版画であったということになる。これは、単に西洋児童文学の受容史上において重要な意味をもつさし絵というだけでなく、初期の絵画史上においても見逃すことのできない貴重なさし絵ということになる。われわれは『正則文部省英語読本』という教科書が有するこの文化史上・文学史上の意義にも十分な関心を向ける必要がある。